

第6節 5 大学で実施された学生及び教職員によるKUGの評価

堀 洋元 (大妻女子大学 人間関係学部)

1. はじめに

令和4年5月に東京都が公表した「首都直下地震等による東京の被害想定」によれば、都心南部直下地震 (M7.3) が起こった場合、都内で約453万人もの帰宅困難者が発生すると想定されている (東京都防災会議, 2022)。近年の大規模な自然災害において、職場や大学などの外出先から自宅へ帰れない帰宅困難者対策が危惧されており、その支援施設の果たす役割は非常に大きい。しかしながら、災害はいつ、どこで、どのような規模で発生するかによって被災の様相は異なり、帰宅困難者支援施設の運営マニュアルを作成するだけでは実際に機能することは難しく、混乱を来す可能性がある。

災害発生時にこのような状況に至るのを防ぐために、受け入れ施設となる大学は日頃から多様な被災状況や想定外の事態に備えたシミュレーションが必要である。廣井・黒目・新藤 (2015) は、静岡県が開発した避難所運営ゲーム (HUG) をもとに帰宅困難者支援施設運営ゲーム (以下 KUG と表記) を開発している。KUG は実施するための材料 (施設平面図、帰宅困難者カード、帰宅困難者コマ、イベントカード) や実施手順が定められているが、実施施設に合わせてカスタマイズして活用することが推奨されている。たとえば伊藤 (2022) では一時滞在施設となっている大学で大学生および教職員を対象とした KUG を実施し、基礎的検討を行っている。

KUG のような図上演習ツールは、帰宅困難者対策だけでなく避難所運営のシミュレーションとして開発されたものがある。上述した HUG のほか、松井他 (2005) や元吉他 (2006) による STEP (広域災害における避難所運営訓練システム) があり、大学生や地域住民を対象として開発し活用されている。

そこで本節では、対象となる大学において学生を対象とした KUG を実施することで、帰宅困難者支援施設としての備えを高め、施設ごとに実用的な KUG を開発することを目的とする。

2. 方法

実施期日 : 2022年9月17日・12月3日・17日、2023年1月7日・2月22日・3月10日

実施場所 : 千代田区に所在する5大学内の教室等

参加者 : 千代田区内の大学に所属する大学生・大学院生、教職員91名。男性31名、女性59名、無回答1名。平均年齢27.4歳。居住形態は家族と同居が60名、ひとり暮らしが27名、友達とルームシェアが2名、食事付きの学生寮が2名であった。ボランティア活動に参加したことが「ある」が46名、「ない」が45名であった。

実施機材・器具 : KUGキット (廣井他, 2015)、施設平面図、筆記用具、付箋を使用した。提示用として施設内の備蓄リストを用意した。各大学での機材・器具等は本章前節までを参照のこと。

質問内容 : ①松井他 (2005) や元吉他 (2006) による STEP 実施後の評価 (11項目: “1 全くあてはまらない” から “5 よくあてはまる” までの5段階評定)、②伊藤 (2022) で使用された KUG 評価項目 (7項目: “1 全くそう思わない” から “5 強くそう思う” までの5段階評定; ただし項目により評定ラベルが異なる)、③島崎・尾関 (2017) による防災意識尺度 (20項目: “1 全くあてはまらない” から “6 とてもよくあてはまる” までの6段階評定; 被災状況に対する想像力、災害に対する危機感、他者指向性、災害に対する関心、不安の5下位尺度から構成)、④今回実施した KUG の改善点 (自由記述による回答) および⑤個人属性項目 (性別、居住形態、ボランティア活動の参加経験) を使用した。

実施手続き：KUGは廣井他（2015）による実施手順をもとに、施設ごとの特徴に合わせて適宜内容を調整した。またSONPO リスケアマネジメント株式会社（2017）によるスライド資料を参考に進行内容を提示した。実施には導入や事前説明、KUG実施、実施後の評価回答、ふりかえりを含めて約3時間を要した。

3. 結果

（1）図上演習ツールとしての効果測定

松井他（2005）や元吉他（2006）でSTEP実施後に使用された11項目の平均値を表4-6-1に示す。「1-7 防災教育に役立つと思う」「1-1 興味深かった」「1-10 学ぶことが多かった」「1-11 参加意欲がわいた」の順で平均値が高く、「退屈した」「時間が長く感じた」の平均値が低かった。元吉他（2006）での実施後と比較すると、学生データの平均値の高い項目は同様であった。平均値の低い項目も同様であったが、「1-4 難しかった」は元吉他（2006）では4点台となっており、今回のKUGの方が相対的に取り組みやすいと評価していた。このことから、KUGは他の図上演習ツールと同様の効果を得ることができ、参加者にとって興味深くかつ学びが多く感じられ、参加へのモチベーションを高めるツールであることが示唆された。

表4-6-1 実施後の評価の基礎統計量

変数名	有効N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
1-7. 防災教育に役立つと思う	91	4.82	0.46	2	5
1-1. 興味深かった	91	4.68	0.53	2	5
1-10. 学ぶことが多かった	91	4.66	0.58	2	5
1-11. 参加意欲がわいた	91	4.52	0.62	2	5
1-9. 実際はこんなものではないと思った	91	4.14	1.06	1	5
1-5. もっとやりたかった	91	4.04	0.93	1	5
1-3. やり方はよく分かった	91	4.02	0.84	1	5
1-8. 現実味があった	91	3.89	0.95	1	5
1-4. 難しかった	91	3.49	1.10	1	5
1-6. 時間が長く感じた	91	2.05	1.08	1	5
1-2. 退屈した	91	1.57	0.65	1	3

（2）伊藤（2022）でのKUG評価項目による効果測定

伊藤（2022）で実施した大学生および教職員対象のKUGでの7項目を表4-6-2に示す。7項目とも肯定的な回答が多くを占めていた。とくに「2-3 KUGは、大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生にとって、有意義な教材である」「2-5 KUGのような一時帰宅困難者受入施設の運営訓練は今後も必要である」「2-4 キャンパス近隣の民間企業の社員や大学教職員、学生など帰宅困難者対策や支援に関心のある方々にKUGへの参加を薦めたい」「2-6 KUGのような一時帰宅困難者受け入れ施設としての運営訓練があれば、今後も参加したい」の平均値が高かった。参加者の多くはKUGを有意義な教材と評価し、KUGのような運営訓練の必要性を感じており、周囲にKUGの参加を進める意向を持っていた。また自身も参加意欲を示していた。このことから、KUGに継続して参加すること、参加経験者の周囲の人々にも参加を呼びかけることが可能であることが示唆された。

表4-6-2 KUG評価項目の基礎統計量

変数名	有効N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
2-3. KUGは、大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生にとって、有意義な教材だと思いますか？	66	4.71	0.49	3	5
2-5. KUGのような一時帰宅困難者受け入れ施設を運営訓練は今後も必要だと思いますか？	66	4.71	0.52	3	5
2-4. キャンパス近隣の民間企業の社員や大学教職員、学生など帰宅困難者対策や支援に関心のある方々にKUGへの参加を薦めたいと思いますか？	66	4.44	0.56	3	5
2-6. KUGのような一時帰宅困難者受け入れ施設としての運営訓練があれば、今後も参加したいですか？	65	4.42	0.61	3	5
2-7. 大規模自然災害後の安全が確認されている場合、学生が帰宅困難者の支援に貢献できると思いますか？	66	4.24	0.63	3	5
2-1. KUGを体験した大学生は、帰宅困難者一時滞在施設が必要とする支援への協力を行えると思いますか？	66	4.11	0.59	2	5
2-2. 大学生の防災対策および帰宅困難者支援対策の課題について、自らの経験に基づく振り返りができた（できる）と思いますか？	66	3.97	0.61	2	5

(3) KUG 実施後の防災意識尺度得点

KUG 実施後に測定した防災意識尺度（島崎・尾関，2017）の基礎統計量を表4-6-3に示す。質問項目の左側に下位尺度名を示した。下位尺度のうち「災害に対する関心」は逆転項目として再計算を行った。「4-6 ひとたび災害が起きれば、大変なことになると思う（災害危機感）」「4-12 災害は明日来てもおかしくない（災害危機感）」「4-17 防災は自分の地域だけで完結するのではなく、他の地域との連携も必要だと思う（災害危機感）」の3項目は平均値が5点台を示しており、いずれも災害危機感の下位尺度項目であった。ついで「4-15 災害対策は耐震補強や防波堤の整備など物理的なものだけで充分だと思う（災害関心）」「4-20 他の人のために何かしたいと思う（他者指向性）」「4-2 自分の利益にならないことはやりたくない（災害関心）」平均値が高かった。全体的に肯定的な回答を示しているが、その中でも「災害危機感」や「災害関心」「他者指向性」の下位尺度項目の平均値が高かった。

表4-6-3 防災意識尺度17項目の基礎統計量

変数名	有効N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
災害危機感 4-6. ひとたび災害が起きれば、大変なことになると思う	91	5.55	0.67	3	6
災害危機感 4-12. 災害は明日来てもおかしくない	90	5.34	0.96	2	6
災害危機感 4-17. 防災は自分の地域だけで完結するのではなく、他の地域との連携も必要だと思う	91	5.32	0.84	3	6
災害関心 4-15. 災害対策は耐震補強や防波堤の整備など物理的なものだけで充分だと思う（逆転）	89	4.84	1.24	2	6
他者指向性 4-20. 他の人のために何かしたいと思う	91	4.78	0.85	3	6
災害関心 4-2. 自分の利益にならないことはやりたくない（逆転）	91	4.58	1.08	2	6
他者指向性 4-4. いろいろな友だちをたくさん作りたい	91	4.47	1.26	1	6
他者指向性 4-16. 人とコミュニケーションを取るのが好きだ	90	4.41	1.04	2	6
不安 4-7. 自分は心配性だと思う	91	4.36	1.03	2	6
災害危機感 4-13. 個人の努力だけで災害の被害を減らすことは難しいと思う	90	4.14	1.43	1	6
不安 4-10. 災害の事を考え始めると、様々なパターンの被害を妄想してしまう	91	4.14	1.20	2	6
被災想像力 4-3. 災害発生時に必要となる物資の具体的なイメージがある	91	4.12	0.80	2	6
被災想像力 4-1. 災害発生時に人々がどのような行動を取るか具体的なイメージがある	91	4.01	1.02	2	6
被災想像力 4-19. 災害発生時に自分がどのような対応をすればよいか具体的なイメージがある	90	3.98	0.89	2	6
不安 4-8. 不安を感じる事が多い	91	3.96	1.16	2	6
不安 4-14. 身の周りの危険をいつも気にしている	90	3.87	1.01	2	6
災害関心 4-11. 普段は災害のことは考えない（逆転）	90	3.82	1.24	1	6
被災想像力 4-5. 災害発生時に町がどうなるかの具体的なイメージがある	91	3.77	0.93	1	6
災害関心 4-9. 自分の身近なところで起きそうなことだけを考える（逆転）	90	3.66	1.01	1	6
他者指向性 4-18. 人が集まる場所が好きだ	90	3.56	1.32	1	6

(4) 今回実施した KUG の改善点

今回実施した学生版 KUG の改善点について、自由記述で回答を求めた (表 4-6-4)。回答内容から①進行、ルール説明、実施手順について、②帰宅困難者カード、コマ、平面図について、③受入方針について、④役割分担について、⑤実施時間について、⑥その他 (アイデアなど)、⑦感想など (未分類) の 7 つに分類した。①進行、ルール説明、実施手順について、「ルール説明が不十分で少し、戸惑った」「始め方、タイムスケジュールがよく分からなかった」など、進行やルール説明に関する改善点があげられていた。②帰宅困難者カード、コマ、平面図について、多くの改善点が指摘された。しかしながらカードやコマ自体の問題というよりは、類似するカードが出てくるといったカードの提示方法に関する改善点が指摘されていた。コマと図面の縮尺に関する指摘もいくつかみられた。③受入方針について、事前に決まっている方が良いとする意見が複数みられた。④役割分担について、KUG を実施しながら役割分担を意識して取り組むことが難しい、とする意見がみられた。役割分担を決めていてもイベントの返答や受付しかできずに進行していることが窺えた。⑤実施時間について、上述の評定法によるアンケートでは時間が長く感じられなかったとあるとおり、むしろもう少し時間があると良いとする回答がみられた。KUG 上での時間の流れが早いため、消化不良で進行していくことも一因であることが窺えられた。⑥その他 (アイデアなど) では、アプリゲームでの展開や他の大学での意見を集約し、どの参加者でも確認できるフィールドを作る必要があるといったアイデアが得られた。

4. 考察

(1) 帰宅困難者支援施設の図上演習ツールとしての実用性

図上演習ツールとしての効果測定や KUG 評価項目による結果から、参加者は今回実施した KUG の有効性や有用性を感じており、自身にとっても動機づけが高まる体験であることが示された。これは STEP (松井他, 2005, 元吉他, 2006) によるものと同様の回答結果であり、今回実施した KUG の有効性を示唆している。しかしながら、実施後の短期的な有効性や有用性に過ぎなく、持続的な有効性や有用性に役立つかどうか今後検討していく必要がある。また、どのような測度で有効性や有用性を実証するのか、検討の余地がある。

(2) KUG 実施後の防災意識

防災意識尺度の下位尺度のうち、災害に対する危機感や災害に対する関心、他者指向性に関する項目が相対的に高かったことから、災害や防災を自分ごととしてとらえている項目への反応が得られていることが明らかになった。ただし、KUG 実施直後での回答のため、縦断的に防災意識の推移を測定することで KUG 実施による防災意識の維持や向上が得られる可能性がある。

(3) 今回実施した KUG の改善点

実施内容に関する改善点がいくつかみられた。今回の参加者の多くは初めて KUG を実施しており、プログラム全般を十分に理解して臨むこと自体が難解であったことが自由記述回答から窺える。プログラム内容の改善だけでなく、実施するインストラクター側の養成も必要であることが示唆された。さらには、参加者が継続して KUG を体験することによって、新しい発見や帰宅困難者受入施設を運営するスキルを得たりすることが考えられる。単発での参加だけでなく、継続して参加した場合の有効性や有用性を検討することも必要である。

表4-6-4 学生版KUGの改善点（自由記述による回答 N=44）

進行、ルール説明、実施手順について：5

先にKUGに取り組んだうえで、振り返りの中で備蓄倉庫を見る流れでも良いかも知れないと感じた。
ゲームの説明は、一通りはじめにさせていただくと、よりわかりやすいと感じました。
ルール説明が不十分で少し、戸惑った。
始め方、タイムスケジュールがよく分からなかった。ロールプレイングで研修できるので、良い教材だと思う
面積で受け入れ人数を決めるのではなく、実際の受け入れ場所の状況(机・椅子が固定かどうかなど)で決めた方が良かった。

帰宅困難者カード、コマ、平面図について：10

コマの比率改善と帰宅困難者カードのランダム性を増やした方が良かったと思いました
帰宅困難者カードが100番台で旅行者が多かったので、実際はばらつきがあるのでカードをもっとランダムにしても良い気がします。
カードの公式化は少し感じます。同じ状況の人が多すぎます。
同じ内容のカードが多いので、バリエーションが必要と思いました。
フィールドの縮尺を正確にすることは必要だと思っています。
見取り図の縮尺
図面の縮尺の適正化実施時間の設定
間取りは分かったが、しまえずに置いてあるものもあるのでそこも書いてあると良かった
対象施設の階層別シートと一つひとつのコマがもう少し大きければ扱いやすくなると思いました。
食料や水分など数値化できるところは数値化していけば意識向上できると思う。

受入方針について：3

受け入れ方針など、決めれるところは事前に決めて欲しい
受け入れ方針を事前にしっかり確認した方が良いのではないかと感じました
前もって、受け入れ方針を詳しく決めておいた方が良いのではないかと感じました。

役割分担について：2

役割はあんまり表現できません。物資などの部分に関われないイメージでした。
役割分担ははっきりしないイメージでした。イベントの返答と受付で時間が終わりました。

実施時間について：7

もう少し時間があつた方がよい
もう少し時間をかけて行ったほうがいい、と思った。
拘束時間が少々長く体力を要すると感じた。説明を簡潔に行い、作業時間を長く取れると良いと思う。
ゲーム中の時間の流れがかなり早いため、その点を注意事項として伝え、対応の時間配分を気にかける必要があつたと思いました。
討論の時間が増やした方が良かったと思いました
図面の縮尺の適正化実施時間の設定
準備に時間がかかること。人数ある程度が必要なこと。アプリゲームなど、パズル感覚のゲームとして隙間時間にやるのは面白そう。

その他（アイデアなど）：4

感染症対策
他の大学での活動実績や出た意見を集約し、どの参加者でも確認できるフィールドを作る必要があるように感じる。
準備に時間がかかること。人数ある程度が必要なこと。アプリゲームなど、パズル感覚のゲームとして隙間時間にやるのは面白そう。
もっと様々な人に認知してもらって、参加出来る対象を増やしてもいいと思う。

感想など（未分類）：14

あんまりないです
特にありません
特にないです。
なし
非常に現実味の強いもので興味深く取り組むことが出来ました。改善した方が良い点は思い浮かびません。
1回目のkwuすごく良かったです。
いまいち想像ができないなと思った
イベントカードと、受け入れのタイミングが難しかった。
イベントカードの内容は、学生と職員で別にした方が良かった。学生では対応しきれない内容もあると思った。
チームに経験者がいないと、効率的に進まないと感じた。そのような配慮が必要である。
施設の設備の理解が足りなかったと感じました。
避難施設として考える施設の理解が足りなかったため、どこが使える場所で、どんな場所にあるのか、などの配慮のできる設営が考えずらかった。
意見を沢山出し合ってその中で話し合った方が様々な改善方法が出ると思った。
もっとマニュアル化が必要だと思った

※複数の意見が含まれている回答は複数のカテゴリに分類した。

5. 引用文献

- 廣井悠・黒目剛・新藤淳 (2015) 帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発に関する研究, 東日本大震災連続ワークショップ論文集, 地域安全学会: 1-4.
- 伊藤マモル (2022) 学生及び職員による KUG (モデル校: 法政大学) の学習体験, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (1) 学生版 KUG (帰宅困難者支援施設運営ゲーム) の開発報告書, 千代田区キャンパスコンソ, 53-67.
- 松井豊・竹中一平・新井洋輔・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・元吉忠寛・堀洋元 (2005) 広域災害における避難所運営訓練システム (STEP) の開発過程と効果検証, 筑波大学心理学研究, 30, 43-49.
- 元吉忠寛・松井豊・竹中一平・新井洋輔・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・堀洋元 (2006) 広域災害における避難所運営訓練システムの構築と防災教育の効果に関する実験的研究, 地域安全学会論文集, 7, 425-431.
- 島崎敢・尾関美喜 (2017) 防災意識尺度の作成 (1), 日本心理学会第 81 回大会論文集, 69.
- 東京都防災会議 (2022), 首都直下地震等による東京の被害想定報告書, 東京都.

補注

- 1) 本研究は大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認を得て実施された (受付番号 04-021)。
- 2) 本研究の一部データは日本災害情報学会第 26 回大会で発表された。

まとめと今後の展望

令和4年度は、「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究（2）教職員及び学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発」と題して学際的な共同研究事業をすすめ、下記の3点の成果を得ることができた。

第1点として、千代田区における過去の自然災害記録の教材化である。江戸時代の火災である天和の大火、そして、今年、震災が発生してちょうど100年目にあたる関東大震災、この二つの千代田区における過去の自然災害の被害状況の記録と記憶から、当時の人々が頻発する大災害下をどのように生き抜いてきたのか、過去の災害記憶を辿ることができた。さらには、こうした千代田区の過去の災害に関するウィキペディア記事を執筆するワークショップを実施することで、学生からの防災意識を高め、主体的にその情報を発信し、地域との関わりを主体的に生み出していく機会を得ることができた。これから何を学び、どのように未来に繋げていくべきか、ということを考えたい。

第2点としては、防災に必要な情報・備蓄品等のアーカイブ化をすすめることができたことである。具体的には、模擬的な帰宅困難者一時滞在支援施設における一泊二日の宿泊がストレス関連指標、ヘモグロビン濃度、脈拍数、唾液アミラーゼ活性、および心理的ストレス反応尺度に及ぼす影響を確認することができた。また、帰宅困難者支援施設におけるどのようなトラブルがあるのかを考え、そこでの課題の背景や対応策を考えるための基礎資料として、実際の帰宅困難者対策の取り組みが紹介されているサイトを集約することができた。さらには、要配慮者（乳幼児）に注目しながら、災害時の帰宅困難者に向けた栄養・食支援のあり方や、備蓄食品を用いた料理の実習効果も検証することができた。

第3点としては、帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG）を各大学の特徴を踏まえて5大学において開発・実施した。また、その学習評価をどのように進めたらよいか、教育介入を行うための評価指標も提案することができたことも大きな成果である。各大学において、KUGを防災教育の質的向上に資する教材として活用し、KUGによる図上演習を通して、万が一にも学生ボランティアとして避難施設の運営に携わることになった場合の心構えや対応力を養成することにもつながった。学生は多様な避難者および避難所で生じる問題を想定し、臨機応変に対応することの困難さを自分事に置き換え、防災行動に対する複眼的な目を養うことでサスティナブルな防災意識向上に資する大学教育の在り方を学生とともに探求することができたことが今年度の大きな成果である。

次年度、令和5年度も千代田学の共同事業として展開していくことを計画している。過去2年間の研究成果を活かし、5大学において、地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発を試みる予定である。千代田区内の公共施設および企業と連携し、各大学のKUGの効果および帰宅困難者受入れ施設としての運営能力を検証するとともに、より精度を高めた施設運営ガイドラインを作成し、各大学で共有する。同時に、災害復興や防災対策に役立てるために、千代田区における過去の災害の記録、また、防災に必要な情報・用具等の動画コンテンツ等を再編集し、その効果を検証していく。各段階で、研究により得られた知見や解決した問題点などの資料を、千代田区の危機管理政策経営担当部門に提供したい。

千代田区キャンパスコンソの複数の大学で取組むことにより、1つの大学による提案では難しい多角的な視点から調査・研究をすすめ、各大学の学生が連携して取り組み、多様なものの見方・考え方を理解し、新しい気づきにより柔軟な発想によって千代田区に貢献できる研究提案をしていきたい。

（研究総括・酒井 治子）

謝 辞

昨年度から引き続き、千代田区より助成を頂き、令和4年度の研究活動が出来ましたことに深く感謝いたします。これを機に、千代田区の帰宅困難者支援の施策に学び、大学の役割を、教職員が学生と共に語り合い、学びあう機会を持つことができました。防災・減災意識を高めることは、学生・教職員の互いの命を守ることはもとより、家族、地域と共に、過去を生きてきたこと、また、これから生きていくことへの期待と挑戦となっていくことなのでしょう。同時に、本研究を通して、千代田区キャンパスコンソの活動自体も強化することができたことも財産となっています。

本研究を進めるにあたりまして、千代田地域振興部コミュニティ総務課、政策経営部災害対策・危機管理課、千代田保健所健康推進課の皆様には、研究事業の遂行を多面的にご支援いただきました。心より感謝申し上げる次第です。また、私たちの研究活動を支援し続けていただきました関係者の皆様のご理解とご協力に、この場をお借りして深甚の謝意を表したいと存じます。

今後も千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）の活動にご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

執筆者（50音順）

伊藤 マモル（法政大学 法学部 教授）	：第3章 第1節、第4章 第1節
近藤 壮（共立女子大学 文芸学部 准教授）	：第2章 第2節、第4章 第4節
酒井 治子（東京家政学院大学 人間栄養学部 教授）	：第1章、第3章 第3節、第4章 第2節
下坂 智恵（大妻女子大学 短期大学部 家政科 教授）	：第3章 第4節
谷島 貫太（二松学舎大学 文学部 准教授）	：第2章 第3節、第4章 第3節
堀 洋元（大妻女子大学 人間関係学部 准教授）	：第3章 第2節、第4章 第5節・第6節
水田 瑠奈（共立女子大学大学院 修士課程1年）	：第2章 第1節

（所属は2023年3月現在）

令和4年度 「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度 共同事業 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (2) 教職員および学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発 報告書

令和5年（2023）3月

「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）」
幹事校 東京家政学院大学 人間栄養学部 酒井 治子
〒102-8341 東京都千代田区三番町22番地
TEL:03-3262-2251



千代田区キャンパスコンソ

Chiyoda Campus Consortium